
未来人学者 カスパネル・シュミット氏の話

日野成美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来人学者 カスパネル・シュミット氏の話

【Nコード】

N 6 6 2 8 P

【作者名】

日野成美

【あらすじ】

「奴はどうにも、何か起こす気がしてならない」??。

竹仁と大学文化人類学部に通うヤヨイさんの目の前に、《未来人》と名乗る《学者》・カスパネル・シュミット氏が現れた。手帳を探しているとわめき、ミスタードーナツに感激し、棲んでいる図書館の本を読破しては、未来の《女史》にレポートを送る……そんな《未来人》「シューさん」が、同じ大学のタカシ君、マチさん、マチさんのおばさんのキミコさんなど、《現代人》を巻き込んで、自分の先祖の手帳にまつわる謎を解いたり、二十一世紀初頭に赴任し

た理由《おそ咲きの桜の彼女》を追う様などを、主にヤヨイさん視点で書き進めていく、連載小説。

月一回更新予定。時折「Extra」として、シウーさんの上司《L・M・L・女史》の話も入ります。

Act・0 Prologue 〈隔絶された未来世界〉（前書き）

知る人は知る「カスパネル・シュミット氏の話」、ようやく本格始動です。

今回のプロローグは、わけがわからない部分もありましょうが、まあ、ずいっと、お読みなさいませ。筆者日野成美における《未来世界》世界観などの考察です。

Act・0 Prologue 〈隔絶された未来世界〉

この《隔絶された未来世界》と言うのは、真っ白な靄の空間に似ている。

過去から運ばれてくる《枝》によって、靄ははつきりとした形をとる。

この《未来世界》には、《過去》がない。

なぜ、この世界に直接した《過去》がないのか、誰にもわからぬ。この未来は???方舟。

鳩をはなつて、陸から運ばれてくるオリーブの枝を待つ。

「それにしても、こつも揃うと、見物だな」

暗幕に似たカーテンの隙からそつと向こうを垣間見て、《女史》は呆れたように呟いた。

まるで急ごしらえの喜劇舞台だった。さまざまな衣服の人物が、さまざまな年代、性別、人種の人々が入り乱れていた。それにしては、奇妙で滑稽な舞台上のように???古代、中世、近世、近代、現代???ヨーロッパ、アジア、中東、アフリカ、その他名を知られていない場所や人種???の人間が入り乱れている。

実際、《女史》のいる控室も、舞台袖に似ていた。その木の椅子に、足を組んで腰掛けた《女史》のかたわらには、書類をたずさえ、ツイード布地のスーツを着た、栗色の髪に銀色の瞳の若い女性が立ち控えていた。

そのツイードの若い女性が応える。

「赴任する宇宙が、今回はたまたま同じですけど、時間軸や国が別だったりしますから」

「そうになると、こつも細部まで《場》が整うものか???煙草吸っていいか、シャーラ」

「どうぞ。訓辞の時間まであと四分あります」

もうすぐ三十の坂に手が届く《女史》は、煙草入れから煙草を一本つまんで取り出すと、口に挟み、す、と人差し指をその先に当てた。火がついた。他の煙草にはない、甘い薬草のような香りが、控室に充ちた。《女史》は赤いレディス・スーツに赤いハイ・ヒールストレートのブロンドは、煙草のタールで傷んでいる。ツイードの女性は、耳の裏にしばらく手を当てていたが、やがて元のように姿勢を正す。

雑談を交わしている《学者》たちの傍らでは、白衣を着て奇怪な眼鏡（『特異波動電子増幅眼鏡』と彼らは呼んでいた）をかけ、奇怪な電子部品やコードを身体のおうちこつちにひっかけている、電脳部隊の一隊・タイムワープ専属部隊が立ち働いている。種々様々な機械を手渡したり、《タイムマシン》?? 実際には、単なる椅子やベッドにしか見えなかった、年代や材質は違ったが?? を前に、図面を見て最終調整をしている。

《女史》は、にぎやかに談笑している、二十数人の《学者》と呼ばれる《未来人》たちを見た。今回集まったのは、ほとんどが男性だ。《過去宇宙》の中の一系統・《初期過去》から《中期過去》に赴任するものが多いのだが、その宇宙の初期の時代では、女性が学問をするのはどうやらあまりよろしくないらしい。数人女性がまじっていたが、彼女らはどれも《中期未来》へ派遣されることになっていた。

?? 彼ら《学者》は、これから、《過去》へ赴任するのだ。

「太陽系第三惑星地球、か……そう呼ばれているんだっけな、あつちの宇宙じゃ」

シャーラ、と呼ばれたツイードの服の女性は、頷いた。

「ええ、創意に富んだ人間の文明があると、既に赴任している《学者》の報告書にあります」

「創造は常に破壊と表裏一体だ。事実、母体となっている惑星が蝕まれているそうじゃないか」

「それについては、環境部門のキムとフ란ツが調査する予定です」
「あいつは？ あの手帳莫迦の」

きよとん、としたシャーラは、その次、思わず吹き出した。

「文化人類部門のカスパネル・シュミットですか？ そうですね、環境に配慮した手帳のリファイルについて、膨大なレポートを書いていましたね」

「奴の祖父の二の舞にならなきゃいいが」

紫煙を輪の形にして吐き出しながら、《女史》は少し遠い目をした。

「けれども、ルーティア、カスパネル・シュミットが志願した理由からして、すでに？？」

シャーラが言いかけたところでふいに、ティン、と、何か琴^{きん}を弾いたような音がした。それで我に返ったように、シャーラは一瞬硬直する。ティンティンティン、と、さらに続けて三回鳴った。

すつと身をかめると、シャーラは《女史》にささやく。

「お時間です、《女史》。四分経ちました」
「ん」

《女史》は、シャーラの差し出した金属の灰皿（以前派遣した《学者》の収穫物で、今は《女史》の私物）に煙草を押し付けると、控室の暗幕カーテンを派手に開け放って、舞台に、進みでた。

布がバフツと勢い良くめくれ上がるその音、そして、遠目にも目立つ、スカーレットのスーツを見ると、学者たちのざわめきが低くなりだした。

だれともなく整列した《学者》たちの前に、この赤いスーツの女、《L・M・L・女史》はすつくと立つ。そして、じつとひとりひとりの顔を見ると、よく通る張りのある声で、訓辞を始めた。

「当代ルーティア・マリーリン・リンザだ。《学者》諸君、今回、この《隔絶された未来宇宙》から、さまざまに運ばれて来た《枝》によって、《過去宇宙》に赴任できるこの僥倖を、各々感謝するよう。これからいくつか訓辞を与える。？？あー、長くないよう

にするから。タイムワープ隊は、整備を続けるように」

同じように気をつけをし、じっとこちらを見るタイムワープ隊に声をかけ、彼らが作業に戻ったのを確認すると、学者たちの間を、《L・M・L・女史》は縫うように歩きだした。

「諸君らは、《過去》へタイムワープ??次元および時間を移動する。その諸原理についてだが……さあ、私にはよくわからない」

《女史》自身も、職業柄、何度も次元時間移動は経験している。

タイムワープ隊に尋ねてみたところ、対象過去から椅子やベッドを入手し、ある一定の動作を加えると、そこから伸びている《道標》に沿って、過去へ辿りつくのだそうだ。移動方法が椅子やベッドというのは、移動に伴う肉体的負担を軽減するため、深い眠りに落ちさせる必要があるかららしい。しかしそのタイムワープ法がいつ確立されたのか、最初の《椅子》はどこからやってきたのか、《プロジェクト》の中核に近いといわれている《女史》でさえも、知らなかった。

少し間を置いて、また歩き始め、女史はこう言葉を継いだ。

「ただ、こういう言葉によって、いままでの《未来人》は物事を集約してきた。??人間にはできないことも、神ならできる。神はなんでもできるからだ」??聖典の言葉だ。我々は、この言葉に従って、この《隔絶された未来世界》を理解してきた、しかし、
カツン、と足を止め、今度はさっきとは真反対の方向から、《学者》たちに向きなおる。

「??では、《神》とは何か? 我々の先達、《初期未来人》のもとにあらわれた《ローン・ヴァリオット》のことか? あるいは、ヤーウエ、キリスト、アッラー、ブラフマン、ブッダのことか?

神とは、なんだ? あるいは、他の生物より文明的である人間自身のことか? もしくは、むしろ人間よりも高度な本能を持つ、森羅万象の生物およびそれらに宿るとされる精霊のことか?」

声を低くして、視線を落とし、続ける。

「あるいは、神など、いないのか? 人間の創り出した、不安定で

弱い、人間自身の精神の拠り所となる虚構にすぎないのか。だとしたら、この《隔絶された未来宇宙軸》は、なぜ存在するのか。それならば一から理論を組み立て直さなければならぬ」

しばらくの沈黙をおいて、《L・M・L・女史》は声を張り上げた。

「我々の未来が、過去からほぼまったく隔絶されていることは、何らかの意思が働いているとしか思えない箇所がいくつもある。《初期未来人》は、それについて探るプロジェクトを総合して??《Lone Variotte No.31》と名付けた」

思わず、《学者》たちがざわめいた。《Lone Variotte No.31》??ほとんど普遍的でありながら、幻に近いプロジェクト・コードネーム。《31番目のローン・ヴァリオット》??

「探ってこい、神がいるか」

そのざわめきを断ち切るようにして、腹に響く声で、《L・M・L・女史》は学者たちに告げる。ぴたり、と声が止んだ。

「初期未来人が遭遇した《31番目のローン・ヴァリオット》が神であるか、というのが、これまで、そして、今回の課題だ。《神》という呼称が嫌なら、《意思》でもいい。なんらかの不可解な意思が働いて、我々は、方舟のようにこの宇宙の靄に孤独に漂っている。何が《Lone（孤独）》で、《ヴァリオット》とは何なのか、《31》という数字は何を示すのか、何もわかつちやいない。そこにわからないものがあるから、探るんだ。探ってこい??以上が一つ目の訓辞だ。《神を探ってこい》、だ」

再び、《女史》は、学者たちの間を歩き出した。彼らの視線が自分に注がれている。それを意識しながら、《女史》は声を張り上げた。

「二つめ??『神ならなんでもできる』??しかし、なるだけトラブルを起こさぬよう、諸君らは契約書にサインをした。『創意抑制宣誓書』」

色めき立ったように空気が変わった。《L・M・L・女史》はちらと彼らを見ただけで、また真っ直ぐと前を見て歩き出す。呪文でも暗唱するように、次の言葉を継いだ。

「『人類がいかに創意に富んでいようと、たとえ試みたところでこの惑星から生物を抹殺することはできない』?? 諸君が派遣される太陽系第三惑星地球に属する、二十世紀から二十一世紀の学者、リン・オーギュリスの言葉だ。諸君も胸に刻み込んだことと思う。この言葉を引用した書類に、すでに皆、署名しているのだから」

《学者》たちの中央で立ち止まり、カツン、と、ヒールをならす。二十数人の《学者》を見渡す。

「抑制その一『決して恋をしてはいけない』?? 子孫をのこして、時間軸を狂わせてはいけない。その場合、世界の均衡が崩れる可能性がある。親の生年月日より子供の生年月日のほうが過去というのは、自然の理論構築を阻む。恋というのは、子孫繁栄のために神から与えられた最高に甘美な感傷だが、なんせ勢いが強い。少なくとも、過去の異性と肉体関係を結ぶな」

またヒールを、今度は二度、カツン、カツン。

「抑制その二『未来のことをむやみに語るな』?? 人間如きに、意外なほど強靱な自然界のバランスは、完全には滅ぼすことはできないと思うが……すでに、ある《学者》によって、その宇宙の人間が、いわゆる《未来的な技術》を手にしてしまったが故に、人類および多数の生物が滅亡してしまった宇宙の事例が報告されている。その学者は、その後、発狂した」

緞子のような沈黙がおりた。一瞬だけ、《女史》はひとりの学者に目をとめたが、その銀縁眼鏡越しの薄いブルーの瞳は、しっかりとこちらを見返してくる。

内心思わず笑みを漏らす。そして、カツツ、カツツ、カツン！

と、《女史》はその沈黙やぶるように強くヒールをならした。

「最後に！」

につ、と笑って、こう言い放つ。

「抑制その三、『メ切、守れ』！　？？《学者》として、レポートの提出は重要な任務で義務だ。各自、前もって伝えた方法で、最低でもひと月に一回、レポート三十枚以上提出しろ」

「それだと、『女史』が困るんじゃないですか？　仕事が増えて」
ひょうきんで有名な《学者》がおどけたように言つと、どつと《学者》たちがわいた。しかし、次に《女史》が言つた言葉で、『学者』たちは笑いを収めた。

「レポートの枚数と内容に応じて、給与が与えられる。増給も減給もありうる。最低限の筆記用具は保障するが、向こうで貧乏が過ぎて野たれ死んでも、自分に回り回つたツケだと考えることだわね」
顎を引いて、見据えるようにすると、ふつ、と《女史》笑みをを浮かべる。

「要するに、こうやって脅迫の要素もありつつ、エサを振って、諸君の仕事を煽動している。『進んで勤めるなら報酬を受けるが、強いられるなら、それぞれに与えられた勤めである。そうせずにはいられない』？？聖典の言葉だ。私のことは気にしないように。お前たちは、『そうせずにはいられない』から、ここにこうして集っているのだろう？」

それから、『女史』は、にやりと笑みを浮かべた。

「それに私には？？有能な補佐もいるし」

ツイードの服の女性？？控室でシャーラと呼ばれていた女性が、ちらりと、いたずらっぽい視線を向けられるや、むっとし、やけっぱちのようにやりかえした。

「ええ、ええ、有能ですとも？？朝、貴女を叩き起こすのから、昼間の雑事、夜中まで長引く仕事への差し入れまで、全部全部わたしの担当なんですからねっ！」

これには『女史』もからからと笑い転げた。

学者たちも笑いさざめいたが、この《セレクトリイ・シャーラ》
および愛称と呼ばれている、『L・M・L・女史』お付きの《ガイ
ノイド》（註：人造人間の一種。ヒューマノイドの女性形を指す）

について、多くを知っているわけではなかった。機械と聞いていた新参の《学者》の中には、シャーラの示したあまりの人間らしさに、面食らっているものもある。

笑いの潮が引いたところで、《L・M・L・女史》は、今度はひとりひとりの顔を見つめる。そうしながら、低く、語りかけていった。

「もうひとつ、これで本当に最後だ?? 諸君は、腸を喰らわれるプロメテウスだ。叡智を求めたがゆえに、生きながらにして鳥に内蔵をつつかれ喰われ続ける神話の英雄。いましめからは決して逃れることができない、すでに、あなたたちは、《学者》だから」

カツ、と、《女史》は姿勢を正すと、威厳ある口調でこう言った。「我らの未来と彼らの過去を、尊重しろ。訓辞は以上だ。?? 《Lone Variotte No. 31で会おう》」

《Lone Variotte No. 31で会おう》?? そう、未来人の挨拶を交わした、《女史》と《学者》たちは、解散の合図とともに、散り散りになった。

《女史》は、セレクトリイ・シャーラに差し出された、何の仕掛けもないソファにかけた。右手を後ろにさしだすと、シャーラが煙草を差し出す。その煙草を、先ほどと同じようにふかしだす。

「?? 《Lone Variotte No. 31》について、あんなに反応が返ってくるとは、思わなかったな」

ソファにかけるや、思わず、といったようにひとりごちた《女史》を、そばに立ったセレクトリイ・シャーラは見やった。

「意外でしたか?」

「考えてみれば、プロジェクトの中核に近いのなんのと言われている私でさえ、筋道だったことは教わっていないんだからな。外郭にいる《学者》たちが、それが伝説や幻と考えていたとしてもおかしくはない」

そうだ?? と、《L・M・L・女史》は思いめぐらせる。未来は真っ白な靄の世界に似ている。そこに、いくつか実態を持ったもの

が、あるだけだ。

それはまるで、方舟。

目をしばしつむると、母の声がよみがえってくる。

（この宇宙はね、過去がないの）

忙しかった母。同じ《リンザ座》にあり、今は亡き母。

（他の宇宙のように、歴史がないのよ。どうやって人間ができて、どうやって自然ができて、どういうふうに営みがあるのか、わからないの。この未来世界が、はたして惑星なのか、他の形態をとっているのか、いろんなひとが試したけれど、わからないのよ。世界を構成する絶妙な方程式もなければ、在りし日の世界を著した歴史書もない）

ハ才だった、まだ《女史》ではなかった彼女の頬を、細い手で包み込んで、ひと言一言、噛んで含めるように、こう言った、母。

（確かにわかっているのは、《初期未来人》たちが発見した、《Lone Variotte No. 31》という存在だけ）

やつれた顔で微笑した母は、そつと、娘の髪をなげた。

（だからね、過去宇宙をひっぱってきて、この宇宙に接続しなくちゃいけないの??それが、ルーティア・マーリン・リンザの名を継ぐ者の、役目なのよ）

「ルーティア、」

シャーラの声がして、我に帰ると、長く伸びた灰が、シャーラの差し出した灰皿にぱたりと折れ落ちたところだった。

「疲れてます?」

「??母さんの言っていたことをね、思い出していたんだよ、シャーラ」

こころなしかおだやかな声になる。シャーラは、少しだけ身を引いて、自分の仕えてきた六代目《L・M・L・女史》を、じつと見つめた。

「この世界はね??何なんだろうね」

新しい煙草に指先を当てて火をつけながら、ゆつたりと、《女史

《はソファにもたれかかる。

今しがた、ひとりの《学者》が、鉄のベッドに乗ってタイムワープをするところである。差し出された薬を飲んで、ごろりと意識を失った《学者》の脇で、タイムワープ隊が電子パネルを何か操作すると、すうつと収縮するように、鉄ベッドは《学者》ごと消えた。あとには白い靄の空間が残り、タイムワープ隊は次の《学者》にとりかかりはじめる。

そうだ?? 過去からの《枝》や《道標》がなければ、この世界はもはや靄へ帰す。すべてが曖昧で、あやふやで、それでも奇跡的に成り立っている。

それがこの?? 《未来世界》。

?? 可変性があるということなのか、と、《LM・L・女史》は幾度も問うた。そして、また自分の中で繰り返す。

この世界は何なのか。過去とは? この未来世界とは?

今ある、《現在》は、何だ?

「《女史》」

ふいに、ひとりの《学者》が、思い詰めた様子で、《女史》のソファの前に立って、《女史》の思索を邪魔した。

封書を手にしている。古風な、紙にインクの封書だ。

そしてその《学者》の顔を見て、思わずうんざりした声が出た。

「来るとは思ったが、来て欲しくなかったな」

《女史》は思い切り煙草を吸った。煙草を、屈辱を耐え忍ぶ術だと、この《LM・L・女史》は学んでいた。

「?? シュミット」

紫煙を相手の顔に吹きつけながら、《女史》は、シュミット、と呼んだ《学者》を睥睨する。

そして、差し出された封書を見る。黄色い印で封をされていた。

「《枝の彼女》か? ?? 懲りないな。何度目だ?」

「何度でも」

《女史》は可笑しくなって、ソファにもたれて笑う。しばらくし

て笑いが収まった後、灰皿に煙草の先を押し付け、髪を掻き上げながら言った。

「私には、お前のような人間が理解できない。《彼女》がそんなに大切な？ たった一度、偶然のハプニングで逢った、当時まだ幼かった《オリーブの枝の彼女》が？」

「それでも」

なおもしぶとい《学者》が差し出し続けている封書の、封印に刻まれた紋章を見た。

蛇が、己の尾を噛んで、輪を象っている。通常『ウロボロス紋章』とよばれる記号だが、正統のウロボロス紋章は、輪の中が六芒星なのに対し、このウロボロスは、輪の中が？？桜の花。

静かに低く、《女史》はつぶやく。

「《己の尾を噛む蛇》、か。？？これがお前の家の紋章になっていることの理由、お前もすでに、気づいているのだろうけれど」

《女史》は、灰皿に古い煙草をもみ消すと、新しい煙草に火をつけた。

「二十世紀初頭への、お前の赴任を許可したのは、私だけの裁定ではない。上層部全体の裁定だ。それなりに、意義があるのだろうな」

鋭い瞳を、縁なし眼鏡の向こうから、《女史》は突き刺すように向ける。

「だが？？ひとつ間違えば、お前の先祖の過ちを繰り返すことになる」

「あれは別次元の宇宙です、祖父は？？」

「シュミット学者ー、カスパネル・シュミット学者ー、二十世紀初頭赴任学者ー、次です」

タイムワープ専属部隊のひとりが、この《学者》の名を呼んだ。しかしながら、カスパネル・シュミットは、懇願するように、《女史》に封書を差し出したまま、動かない。

「お願いします……」

奮える声で、奮える手で。カスパネル・シュミットは哀願してく
る。

「???お願いします」

ふ、と、《女史》は苦笑をもらした。

「お前は、《脅威の部屋》を、開けてしまったんだものな」

ふいに《女史》は煙草を持っていない方の手で、黄色い封印をさ
れた封書を、受け取った。

「預かっておこう」

一瞬、シュミットは、虚をつかれたような表情をした。その直後、
「あつ、いた!」とタイムワープ専属部隊に見つかり、小言を言わ
れながら、肘を引かれて遠ざかっていく。

遠ざかりながら、カスパネル・シュミットは、深々とこちらに、
頭を下げた。

シャーラが、少しかり天をあおぐ。

「よかったですか? 受け取っちゃって」

「これまで奴の嘆願書が何通だったか、統計してあるか? セクレ
タリー・シャーリー?」

「四十五件です。プラス、これで四十六ですね」

「黄色い封印???ということは、まだ問うつもりなのだろう、我々
に」

しばし、《L・M・L・女史》は、煙草を口もとから離れた。

「カスパネル・シュミットが《学者》としてここまで登り詰めたの
は、ひとえに《枝の彼女》との邂逅のせいだ。あの資料が決定打に
なった。《彼女》の資料で、シュミットは《学者》の間で、そして
上層部の間でも一目置かれるようになった」

シュミットがタイムワープ隊に導かれて《タイムマシン》に腰掛
けるのを、すぐめるように見ながら、《女史》は眼鏡の位置を直す。
「だから今回の、二十一世紀初頭赴任もあっさり決まったんだろ
うが???どうにも、何か起こる気がして、ならないね」

シャーラはしばらく、自分の仕える《女史》の独白に耳を傾けて

いたが、尋ねた。

「ルーティア、貴女はどう思います？　上が出すのは、赤でしょうか、それとも、許諾の??」

とんとん、と、灰皿で灰をはたいてから、《ルーティア・マーリン・リンザ女史》は、自分のセクレタリイ《秘書》に向かって、ひよいと手を差し出した。

「シャーリイ?? 煙草」

*

未来というのは、真つ白な靄の空間に似ている。

けれども、これから行く《過去》は違う。

シュミット氏は、タイムワープ隊にうながされて、さえない布張りのソファに案内された。これが今回の場合、いわゆる《タイムマシン》と呼ばれる代物だ。

??この薬を水でゆっくり飲んで、目を閉じて。

言われるままにすると、すぐに眠気のようなものがやってきた。

ぐったりとソファにくずれおちると、タイムワープ隊が彼の荷物をソファの上に乗せて、整える気配がした。

??それでは、カスパネル・シュミット氏、《31番目の孤独なヴァリオットで会いましょう》。

そう、冷静な声が告げるのと同時、意識と身体は、たとえばもうもない深みに吸い込まれていった。

《女史》の煙草の煙の匂いがしなくなったな、と思ったのが、最後だった。

目が覚めると、うすい靄をすかして、黎明が差し込んでいた。シュミット氏はソファから起き上がる。空気がすうつと冴えるように冷えていて、たとえばもうもなく清々しい匂いが鼻孔を突き、次

いで体中に広がる。

光の差す方を見ると、一面の広いガラス窓。シュミット氏は思わず立ち上がっていた??先祖の手帳で見た通りだ??ツツジの生け垣に、きつとあれが、松、それに、あれがもみの木。鳥がさえずる。向こう側から、思いがけなく強く、鋭い光が差し込んでくる。

昇りくる朝日に導かれるようにして、シュミット氏は、この神秘の空間の室内を、見渡した。

整然と並ぶ、天井まで届く書架に、大量の書物。紙とインクと、本にこびりついた人の手あかが、独特の匂いをさせている。

??ああ、ここが、二十一世紀の図書館か。

上司から受け取った腕時計を見る。時刻は、朝六時近く。日付は、二〇一〇年の十月二十八日を示している。

それから、はっと気づくと、自分の荷物を確認した。バック・パックがソファの隅に鎮座している。そのジッパーを開くと、古びた手帳が転がり出て来た。

バタフライ・ストッパーが外れて、《おそ咲きの桜》のしおりがはさまれた個所がぱたん、と開いた。

??二〇一一年十月二十八日。

来年の今日のその個所に、今日、まさに今日の日付で、但し書きが書かれている。赤インキで、《もうひとりの彼女》と《彼》の名が??。

カスパネル・シュミット氏は起き上がって、両手を昇りゆく太陽にかかげた。

手帳を探そう!

祖先が、この時代で手に入れた、あの手帳を。

??二十一世紀初頭の日本に、未来人学者、カスパネル・シュミット氏が、やってきた。

Act・0 Prologue 《隔絶された未来世界》（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

今回は伏線パートでもあるので、これからわかるように回収していきます。次からは比較的正常の話です。

今年中（2010年）に、Act・1（現代世界）を公開することを目標としています。

お見知りおき、ご愛顧のほどを。

筆者日野成美 拝

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6628p/>

未来人学者 カスパネル・シュミット氏の話

2010年12月23日12時10分発行